

大磯（下町）の左義長 —（２）—

日 守 高 造

お仮屋（宮）と七所まいりなど

七所まいりは、正月11日から13日まで、大磯町一円及び近郊の信心深い善男・善女が、平和と家内安全・無病息災を願って、下町8箇所の道祖神のうち7箇所をまわってお参りをする。

道祖神はいずれも、下町通り沿いにお仮屋^{かりや}を建てて七所まいりのお出^{いで}を待っている。お仮屋は両側に門松を立て、その門松には、赤緑・黄色の3色の色紙を貼ってつないだ幟^{しほ}り旗が何十本か奉納される。この幟^{しほ}りには「奉納道祖神」と書き、奉納者名は生まれたばかりの子が幼児にきまっている。門松に並んで長提灯が2はり灯され、その脇では子供たちが曲名「バタ・バタ」と称する大太鼓を賑やかに打ち鳴らす。お仮屋の中は、子供たち^もが数人入って神のお守りをしている。子供たちは次つぎに費銭をあげてお参りをする善男・善女に、いちいちいねいに頭を下げて応待する。頭を下げる数によって、その夜のお費銭の分け前にひびくのであるから、子供たちも真剣である。お仮屋のお守り役は、中將格が1人で、他は年少の子供たちにまかせておき、年長の子供たちは「おかりこ」といって宮の太鼓^{かつ}を担ぎ出し、オカメ・ヒョットコ（

新婚さんを象徴）の面をかぶって、町内・外の商家や新婚世帯などを廻^{まわ}って、「オカリコメデテ、お家はご繁昌、ご繁昌、ご繁昌」と大声で唄い、踊って費銭をもらって来る。

お仮屋は、夕昏れに開帳され、凡そ午後10時近くまで、七所参りが訪れる間は灯りを点けておく。昔は一晚に数百人もの参拝人があって、子供たちの分け前も結構なもので、分け前で食べたり物を買ったりしたものだが、その分け前やお参り人をねらって、南京そば^{なんきん}（ラーメン）の屋台が出て、チャルメラを吹き鳴らして食欲をあおる。寒風の中での熱い南京そばをふうふうやりながら食うのはまた格別で、屋台もひとしきり繁昌したものだった。

下町の子供たちにとって、せいとばらいの前夜祭みたいな3日間は、正月三が日はまた一味違った楽しい日々ではあったろう。

せいとばらいとヤンナゴッゴ

14日はいよいよまつりの本番である。早朝から松や竹、お飾りなどを海辺に運び、せいとばらいのオンベの組立てが始まる。

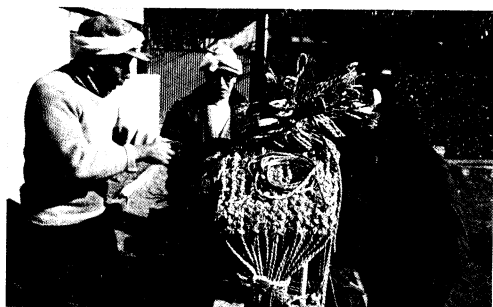
町内長老の指示に従って、先ず立てる場所が定まり、中央にオンベ竹を立てる。オンベ竹は長さ約20メートルの大竹で、根元を砂に埋め、四方に縄を張って固定する。竹にはしかるべき高さ（円錐形に組みあげる先穂の高さ）に心とうのある松2本を結んだものを立て、竹の根方に松買いで求めてきた大松を添えて立て、そのまわりに集めた門松を三角塔になるよう上手に添えながら立てていく。積み上った松やお飾りは縄でしっかりしめつけその上をきれいに編んだ藁^{しめ}の注連飾りを幾重もまわして、中身の松などが見えなくなるまで飾りつけて仕上げる。



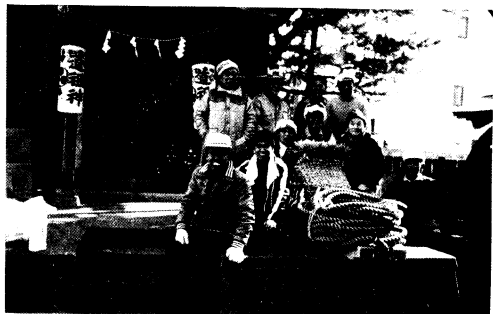
出来上ったオンベは、円錐形の美しい姿で大竹が空に伸び立ち、竹の穂に飾られた吹流しや書初めなどが風に舞っている様は見ごとである。オンベは御神酒で^{きよ}め、立て方の役員たちも豆腐で祝杯をあげる。

海辺に9つ（1つは山王町のつきあいまつりのもの）のオンベが立ち並び、絵を描く人、写真を撮る人なども集ってくる。テレビ記者や新聞記者が取材にくる。テレビや新聞でよく紹介されることもあってか、最近では東京方面などから、歴史家や歌人、俳人なども大勢来て、まつりの長老たちから^いわれや^しきたりなどを聞いたり、また海岸で句座をつくったりして、^せいと^の火入れを待っている。

一方、道祖神の境内では、これも早朝から漁師の^手だれが数人、ヤンナゴッコ（「ヤンナゴッコ、ヤンナゴッコ」という掛け声で大綱を引き合う行事で、約30メートルの太綱に木^{そり}をつなぎ、木^{そり}には厄病神を封じ込めてあるといわれている。縦・横・高さそれぞれ



ヤンナゴッコの準備（大北・道祖神社にて）



50センチメートルくらい^{みやい}の木製の宮居に、藁で^のの^字編みという、たいへん手の込んだ編み方ですっかり包み込んだお飯屋を乗せ、これを引き合う）の準備で忙しい。それに海辺でのオンベ立て班が境内に戻って、ヤンナゴッコの仕度を手伝う者、夜のまつりの万端手落ちのないよう手配りをする者、散らかった物を片付ける者などに別れて準備を進める。すべての準備が整った午後3時頃、高来神社の神主さんをお迎えして、まつりの無事息災をお祈りしていただき、世話人一同も^{おは}らい^いをしていただく。神主さんをお送りして夜の打合せをすませる。もう陽は西に傾き、あたりは夕べのも^せやいして気急わしい。

世話人たちは、ひと刻家での年越しそばを祝って、午後6時、再び道祖神社の境内に集合する。定められた役割に従いそれぞれ散っていく。宮前の提灯に灯を入れる者、ヤンナゴッコの道筋を点検しながら^{とも}しは^{しは}綱を^{あんとん}縛る柱の^{とも}行灯を灯す者、道切提灯を灯して吊り上げる者などの作業を行いながら海辺へ集まって行く。さあ、いよいよ火入れの刻を待つばかりである。

オンベのまわりは、だんご焼きや見物人でいっぱいである。

火入れは、その年の恵方の^{かた}方位を予め調べて火つけ口を定める。火つけ口には、火がつき易い乾いた藁や紙飾りなどを上手にセットする。

世話人一同が集まって、代表者がオンベを御神酒で^{きよ}め、一同も^{きよ}める。

午後6時50分、早番のオンベが燃え出した。そこから提灯が振られて次々に5分間隔くらいで火が入れられる。隣りに火が入れられ、世話人が提灯を振っている。火つけ役は世話人代表が行うのだが、火が1本のマッチでう

まくついてくれと祈るような気持ちでマッチを擦るそうだ。しかし、神のご加護によるのか、火つけ口がうまく出来ているためかは知る由もないが、浜風の中で不思議に1本のマ

ッチで点火し、たちまち炎が立ち昇る。拍手と歓声がどっとあがって、あたりが明るくなり、にこやかな顔、顔、顔が照らし出される。

(続)

ぶんかざい さんぽ



研究ノートから

寺坂の唐臼挽唄

“ばばどこへ行きやる三升^{さんじよざる} 策^{ざいしよ} 下げて ノーエ 嫁^{むめ}の 在所^{ざいしよ}
へ サーンマアヨー 孫抱^だきに”

寺坂に古くから伝わっていた唐臼挽唄の一部である。伝わっていたと書いたのは、既に唄える人は勿論、知る人もほとんどおらず、唄の所在さえごく最近になって確認できたからである。この唄は渡辺美代さん(明治35年生)が、杉崎ユキさん(故・明治18年生)の唄をたまたまテープに録音しておいたもの。唐臼挽唄の他に麦打ち唄も収められているが、残念ながら完全ではなく録音状態も良いとは言えない。しかし、素朴な歌詞や節回^{ふしまわし}、穏やかな唄声には言いようのない郷愁が感じられる。ユキさんは昭和57年に97歳で亡くなっている。このテープは亡くなる前年、つまり96歳のときのユキさんの唄声である。いずれの唄も渡辺慶次郎さん(故・天保12年生)が口ずさんでいたものを覚えたのだという。

渡辺慶次郎さんといえば、日本で初めて落花生^{らっかせい}を栽培した人として広くその名を知られ

楊谷寺谷戸横穴群

通称楊谷寺谷戸と呼ばれる小支谷に、4段27穴からなる横穴群です。これらのほとんどは明治時代に盗掘されていて、時代を示す遺物はありませんが、およそ、古墳時代～奈良時代にかけて造られた墓であることは間違いありません。内部の構造に様々な形が見られ横穴の変化がひと目でわかる非常に貴重な横穴群です。昭和41年7月19日、県の史跡に指定されました。

(鈴)

ている。秦野を中心とした旧中郡一帯が落花生の名産地となったのは、まさに慶次郎さんの存在なくしては有り得なかった。ところが、その後大磯では落花生栽培をやめてしまった。一説には畜産の発展により土地が肥え過ぎてしまったからだというのが、理由は何にせよ大磯で落花生が絶えてしまったことからか、慶次郎さんは伝説的な色彩が強くなってしまった感がある。明治は遠くなったとよく言われるし、まして江戸時代の生まれであるから仕方のないことも知れない。

しかし、ユキさんは慶次郎さんの存在をあらためて身近なものとして思い出させてくれた。そして、江戸・明治・大正を生きた人の心を、唄という不安定な口承を通じて今に伝えてくれた貴重な伝承者であったといえる。

“あたしらがね、長男にしろ長女にしろ、いちばんうえのお産のときにゃ、必ず実家へお産に行ったわけ。そうすん^{そうすん}と嫁いだ先からね、米を下げて持って来んです。そのお産の中にね、お粥なりなんなり白いごはんを食べさせるために、嫁ぎ先の姑が1升でも2升でも米を下げて持って来んです。”

慶次郎さ

んの孫嫁にあたる美代さんが、古き良き時代を偲んでこう語ってくれた。

(佐)